



## “社会階層と社会的ネットワーク”再考 <交際のネットワーク>と<ケアのネットワーク>の比較から

著者	大和 礼子
雑誌名	社会学評論
巻	51
号	2
ページ	235-250
発行年	2000-09-30
その他のタイトル	Social Networks and Socioeconomic Status in Japan : A Comparison between the "Network of Sociability" and the "Network of Care"
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/1903">http://hdl.handle.net/10112/1903</a>

# “社会階層と社会的ネットワーク”再考

——〈交際のネットワーク〉と〈ケアのネットワーク〉の比較から——

大和礼子

社会階層と社会的ネットワークとの関係については、多くの研究が共通して、“階層が高い方がネットワークの構成は多様である”という知見を共通に報告している。本稿ではまず先行研究の検討によって、この知見は社交・相談・軽い実際の援助などをネットワークとして測定した結果得られたものであることを示し、これを〈交際のネットワーク〉と呼ぶ。次にこの交際のネットワークと、自分の身体的ケアについてのネットワーク（〈ケアのネットワーク〉と呼ぶ）の両方を含んだ調査データを分析する。そしてその結果を基に、交際のネットワークについては先行研究と同様、男女ともに階層が高い方がその構成は多様であるが、ケアのネットワークについては、男性と女性では階層の効果が異なることを示す。すなわちケアのネットワークは、男性では、階層が高い方が配偶者と子供に限定され多様性に乏しいが、逆に女性では、階層の高い方が家族に加えて専門機関を含める人が多く多様である。最後にこの結果に基づき、社会的ネットワークは、〈交際〉と〈ケア〉の両面からとらえられなければならないこと、そして〈公共領域と家内領域の分離〉という近代の支配的イデオロギーに適合するような形でネットワークを編成している人は、階層の高い男性に最も多いことを論じる。

キーワード：社会的ネットワーク、ケア、公私の分離

## 1 問題の所在

社会的ネットワーク分析は、個人の直接的な社会環境をとらえるための分析道具として近年、注目を集めている。直接的な社会環境としてのネットワークは、個人を支える資源ともなれば、個人に対する拘束ともなり、われわれの生活に大きな影響を与える（野沢 1999）。

しかも社会的ネットワークは、マクロな社会構造と無関係ではありえない。たとえば都市化という社会構造の変動は、個人が取り結ぶ社会的ネットワークの変化として現れる（Wellman 1979; Fischer 1982）。さらに社会変動の影響は、すべての人々に一様に現れるのではなく、個人が社会構造のどこに位置するかによって異なる。たとえば賃労働と家事労働という社会的分業における個人の位置の違いは、その人が持つネットワークのあり方に影響を与える（Wellman 1985）。し

たがって社会的ネットワーク分析は、個人の経験から社会構造や社会変動を捉えるための、いわば「社会学的想像力」(Mills 1959 = 1965)のための道具でもある。

本稿では、社会階層およびジェンダーと、社会的ネットワークとの関係に注目する。特に社会階層に関しては、個人の階層的地位の違いによってそのネットワークの構成がどのように異なるのかについて、多くの研究が積み重ねられてきた。そしてそれらはほぼ一致して、階層が高い人の方が、ネットワークに友人を多く含み自発的結社や専門機関との関係も多いという意味で、ネットワークの構成は多様であるという知見を報告している。

ところでこのような研究において注意が必要なのは、どのような人間関係をネットワークとして測定しているのかという点である。ソーシャル・サポートの研究が明らかにしているとおおり、サポートの種類により、動員される人間関係は異なる。たとえば楽しみのための交際や個人的問題の相談には主に友人が動員され、高額の経済的援助や子供の世話には親や兄弟姉妹が動員される (Allan 1979; Willmott 1987)。これを考慮に入れると、階層とネットワークに関する代表的研究はどのような人間関係をネットワークとして測定してきたのかが問われねばならない。その測定法によって、個人の直接的な社会環境の重要な部分が、全体として把握できているのだろうか。ある一面のみを捉えて、他の重要な一面は捉えていないというようなことはないのだろうか。

このような問題意識に基づき、本稿ではまず、社会階層と社会的ネットワークについての先行研究のレビューを行い、〈実際のネットワーク〉と〈ケアのネットワーク〉を区別する。次に調査データを分析することによって、これら2種類のネットワークの、社会階層とジェンダーによる違いを示す。最後にこの研究結果が示唆することを、〈公共領域と家内領域の分離〉というテーマに関連させて論じる。

## 2 先行研究の検討

### 2.1 社会階層 (社会階級) と社会的ネットワーク

社会階層によって社会的ネットワークがどのように異なるかについては、様々な地域で、様々な理論的・実践的関心から研究されてきた。そしてその結果、多くの研究が、「男女ともに社会階層が高い方がネットワークの構成は多様である」と報告している。

まず1950～70年代にかけて、労働者階級および中産階級のコミュニティ・親族・職場関係や社交生活などについて多くのモノグラフが書かれた。これらの研究は、第2次大戦後の経済発展にともなう社会変動の結果、伝統的コミュニティや親族関係が崩壊しつつあるのではないかと、また労働者階級のあり方が変化しつつあるのではないかと、といった問題意識に基づいて行われた (Allan 1979; Bott [1957] 1971; Gans [1962] 1982; Goldthorp, et al. 1969; Townsend 1957 = 1974;

Young and Willmott 1957). これら一群の研究で明らかになったのは、第1に、産業化・都市化した社会においてもインフォーマルな絆帯は官僚制的組織にとって替わられることなく生き続け、人々の生活になくてはならないものであり続けているということである。第2に、このようなインフォーマルな紐帯のあり方には階層差が認められるということである。すなわち労働者階級のネットワークは親族中心であり、親族が近くにいない場合には近隣がその代わりとなる。そして友人は少ない。それに対して中産階級の人々は、親族・近隣・同僚に加えて多くの友人を持ち、しかも自発的結社に参加したりその役員を勤めている場合が多い。したがって労働者階級に比べて中産階級の方が、多様な紐帯を持つことが明らかにされている。

このような知見は、続く1980年代に行われた研究においても基本的に支持されている。たとえば北米での調査においては、教育水準・職業的地位・所得などの面で階層が高い方が、ネットワークの構成は多様であることが報告されている (Fischer 1982; Marsden 1987; Campbell, et al. 1986)。

またほぼ同時期のイギリスにおいては、保守党政権による公的福祉支出の見直しとコミュニティ・ケアの強調という一連の政策が推し進められ、それに対する反応として、その受け皿であるインフォーマルな紐帯の実態を明らかにする研究が行われた (Willmott 1989; Qureshi and Walker 1989; Oakley and Rajan 1991; Leger and Gillespie 1991)。そこで明らかになったことも、階層が高い方がネットワークの構成は多様であるという知見を支持するものであった。というよりは、階層差のさらなる拡大が見出された。すなわち、労働者階級のネットワークは親族に偏るうえ、その親族とのつきあいやサポートさえ中産階級より多いとはいえ、労働者階級におけるネットワークは、質・量の両面において、中産階級のそれより限定的であることが報告されている。

また日本に目を転じて、多くの研究が、社会階層が高い方がネットワークに友人を多く含む (大谷 1995)、専門機関を含む (前田・目黒 1990)、ネットワーク・メンバーの職業威信が多様である (菅野 1998a; 1998b) などの点で、その構成は多様であるという結果を報告している。

## 2.2 交際のネットワークとケアのネットワーク

これらの研究で用いられた、ネットワークを抽出する基準は、「会った人」 (Young and Willmott 1957)、「余暇と一緒に過ごす人、訪問する人、家庭でもてなす人、クラブなどへの参加」 (Goldthorpe, et al. 1969)、「社会的に会った人」 (Willmott 1987)、「交際関係のある人」 (Allan 1979)、「重要なことを話しあった人」 (Marsden 1987; Cambell, et al. 1986)、「親しい友人」 (Cambell, et al., 1986)、「接触した人、相談事があったとき助言を求める人」 (前田・目黒 1990)、「親しい人」 (大谷 1995)、「(友人・親戚として) つきあっている人」 (菅野 1998a; 1998b) などである。これらは、交際と相談という基準で抽出されたネットワーク

といえる。また、ソーシャル・サポートに関する複数の項目を社会的ネットワークの測定に用いた研究 (Fischer 1982; Willmott 1987) では、その項目のほとんどは、交際・相談に加えて軽い実際の援助に関する項目であり、重大な援助といえるのは「(巨額の) お金を借りること」という項目だけである (この後論じる、自分自身の身体的ケアに関する項目は1つも含まれていない)。以上から、階層とネットワークに関する主な研究は、交際・相談・軽い実際の援助に関わる人間関係を社会的ネットワークと見なしてきたといえる。本稿では、この交際・相談・軽い実際の援助に関するネットワークを〈交際のネットワーク〉と呼ぶ (この命名の理由は、相談や軽い実際の援助は、社交的なつきあいを基盤にして、その延長あるいはその一環として生じると思われるからである)。

ところで、社会的ネットワークという概念で人間関係を記述・分析してきた研究の中には、交際・相談・軽い実際の援助というカテゴリーには分類できない、人間関係の側面に注目してきた研究がある。それは、人が自分の身体の日常的世話を自分でできない時 (すなわち自分で食事、排泄、入浴といったことができない時)、それを他者にしてもらおうという目的のために動員する人間関係についての研究である。本稿ではこのような人間関係を〈ケアのネットワーク〉と呼ぶ。ケアのネットワークは階層によって異なるのだろうか。まず先行研究を検討しよう。

### 2.3 ケアのネットワーク

先行研究によると、身体的ケアの中心的担い手は近い親族 (配偶者、子、子の配偶者、兄弟姉妹など) であり、それより遠い親族や非親族 (友人、近所の人) が長期のケアを担うことは少なく、むしろ専門機関が関わることの方が多い (Allan 1985)。

身体的ケアに関する研究においては、階層差よりむしろジェンダー差の方が主要な問題と見なされてきた。本稿の課題であるネットワークの多様性に関しては、男性は配偶者頼りであるのに対して、女性では子供や専門機関を頼る人も多く、女性の方が多様なネットワークを持つという傾向が共通に指摘されている (笹谷 1994; 野辺 1999)。

一方、その階層差に注目した研究は意外に少ない。イギリスで1980年代以降に行われた研究においても、①主にジェンダー差に注目し、親族関係を中心に扱う (Ungerson 1987 = 1999; Lewis and Meredith 1988)、②労働者階級を中心に扱う (Leger and Gillespie 1991) といった研究枠組みが採用されており、階層差を中心に扱っているわけではない。ただしこのような研究枠組みの中でも、階層差について触れた部分があり、そこで共通に指摘されているのは、中産階級は民間業者によるケアサービスのある程度利用している (しうる) のに対し、労働者階級はそうではないということである。また Qureshi and Walker (1989) は、本稿の分析とほぼ同じ枠組み——非親族や専門機関との関係も含めて、ジェンダー差とともに階層差も考慮に入れる——を採用しているが、階層の効果とジェンダーの効

果をそれぞれ別々に分析しており、階層の効果はジェンダーによって異なる（階層とジェンダーの交互作用効果）という視点はない。

日本においても、身体的ケアに関するネットワークの階層差というテーマはあまり注目されてこなかった。その中で、次に紹介する高齢者のサポート・ネットワークについての研究は、階層差に着目している。これらの研究は、身体的ケアよりは、交際・相談・軽い実際の援助を中心に扱っている。しかしながら高齢期においては、ちょっとした援助さえ、たいていいつも自分が助けてもらう側にいるという一方的依存の状況で行われる。そのため、交際・相談・軽い実際の援助といった人間関係も、壮年期におけるそれとは異なる意味を持つと考えられる。したがってこれらの研究は、壮年期の身体的ケア（同じく一方的依存という状況で行われる）に関するネットワークについても、何らかの示唆を与えてくれると思われる。

まず玉野和志（1990）は、団地に夫婦2人で住む高齢者の社会的ネットワークについて報告している。それによると男性民間大企業退職者は、その他の男性や女性全般に比べて、兄弟親戚や友人とのネットワークをあまり持っていない。玉野はこれらの人々は、「配偶者と子どもを中心とした『小家族主義的な』傾向の強い社会的ネットワークを典型的に示している」と述べている（玉野 1990: 35）。

次に須田木綿子（1986）は、大都市における男子1人暮らし高齢者の社会的ネットワークを調査している。日常的援助について、親族（主に子ども）にのみ頼ると答えた人には、中年期までは安定した家庭生活を送り、高齢期になって何らかの事情で1人暮らしを余儀なくされた人が多い。彼らは近隣との絆はほとんど形成しておらず、介護が必要になった時は子どもとその家族を頼ると答えている。一方、日常的援助を非親族（主に近所の人）に頼ると答えた人は、離婚によって家庭を失ったり、家出など自ら求めて1人暮らしを選んだ人が多く、「身近な他人」（須田 1986: 43）を中心とする援助ネットワークを形成している。介護が必要になった時には、入院や老人ホームへの入所などを希望する人が多い。

最後に上野加代子（1988）は、中高年の無配偶女性について、階層と社会的ネットワークとの関係を報告している。それによると、学歴、生活程度、フルタイムの職業を持っているか否かなどの点で階層的地位が高い女性の方が、そうでない女性より、ネットワークは多様であり規模も大きい。

これらの先行研究は、高齢期という脆弱性が高まる時期においては、男性では階層が高い方がネットワークは狭く限定的であり、逆に女性では階層の高い方が多様であることを示唆している。そしてこの結果から、壮年期においても、身体的ケアを受けるといった依存的な状況においては、これと同様のネットワークのあり方が見られるのではないかと推察できる。

### 3 分析の目的およびデータの概要

以上のような先行研究の検討に基づき本稿では、ネットワークの多様性に対す

表1 分析対象者の基本属性（妻・夫それぞれN=334）

【年齢】			【学歴】			【夫の職業】		
	(妻)	(夫)		(妻)	(夫)			
35～39歳	12.9%	5.4%	初等教育	9.0%	13.8%	管理		27.8%
40歳代	44.3	41.0	中等教育	52.7	34.7	専門・技術		22.8
50歳代	28.1	29.3	高等教育	17.4		事務		14.7
60歳～ <sup>(注)</sup>	14.7	23.1	高等教育 (短大)			販売		5.7
DK, NA	0.0	1.2	高等教育 (4大～)	15.3		労務		10.5
			DK, NA	5.7	3.3	サービス・保安		6.0
						無職		4.2
						その他		3.9
						DK, NA		4.5
<sup>(注)</sup> 妻はすべて65歳以下。夫は70歳が1人で残りは60歳代。								
【妻の職業】			【夫の年収】			【妻の年収】		
管理・専門・技術	7.8%	フルタイム	8.4%	1000万以上	25.4%	400万以上		4.8%
事務	10.2	パートタイム	28.1	800～1000万	21.0	200～400万		7.5
販売	6.0	自営	1.8	500～800万	32.3	100～200万		7.5
労務	5.1	家族従業	3.3	500万未満	17.7	100万未満		33.0
サービス	9.0	内職	2.1	DK, NA	3.6	なし		37.4
無職	50.3	無職	50.3			DK, NA		9.9
その他	3.6	その他	1.8					
DK, NA	8.1	DK, NA	4.2					
				(単位：円)				(単位：円)

表2 分析に使用する変数

被説明変数	ケアのネットワーク	「病気などで体の自由がきかなくなった時、身のまわりの世話をしてくれる人」	それぞれについて、表3のリストから複数選択（選択あり/なしのダミー変数）
	交際のネットワーク	「悩みや心配事があった時に、親身になって相談ののってくれる人」	
説明変数	学歴	高等教育(短大+4年制大学以上)/中中等教育	
	夫の職業	初任給(管理・専門・技術・事務)/フルタイム(販売・労務・サービス・保安)	
	夫の年収	①800万円以上/未満, ②600万円以上/未満	
	妻の職業	フルタイムまたは管理・専門・技術/その他	
	妻の年収	300万円以上/未満	
コントロール変数	年齢	30～40歳代/50歳代以上	

る階層とジェンダーの効果は、交際とケアのネットワークではどのように異なるのかについて、調査データの分析をとおして明らかにしたい。

分析に用いるデータは、1995年9～10月に、神戸市内の2つの区、および兵庫県内郡部の2つの町に住む、1930～59年に生まれた女性とその配偶者を対象に行った調査から得られたものである。サンプリングは、層化2段階抽出法により行った。1段階目は住宅地の多い地域を選ぶ作為抽出、2段階目は住民台帳からの無作為抽出である。郵送法によって1534票を配布し、有効回収票638票（有効回収率41.6%）を得た<sup>1)</sup>。

本分析では、地域特性を統制して分析を単純化するため、神戸市内のデータのみを用いる。そのうち夫婦ともに回答があった334ケースが分析対象である。したがってこの分析結果は、大都市に居住する壮年期夫婦の特性を反映していると考えられる。表1には分析対象の属性を、表2には分析に用いる変数を示した。

## 4 分析の結果

### 4.1 ケアと交際のネットワークの構成と、そのジェンダーによる違い

表3<sup>2)</sup>によると、ケアのネットワークは配偶者、親、子、嫁が中心で、兄弟姉妹と専門機関（特にホームヘルパー・訪問看護婦、病院）がそれに続き、その他の親族や非親族をあげた人は非常に少ない。一方交際のネットワークにおいては、配偶者、親、子と兄弟姉妹に続いて、非親族が重要な位置を占めており、専門機関をあげた人はほとんどいない。

ジェンダー差については、ケアのネットワークにおいても交際のそれにおいても、多くの項目で、男性より女性の方がその項目を選んだ人が多い（男性の方が多く選んだ項目は、配偶者と職場・仕事関係者のみである）。すなわちケア・交際の両ネットワークとも、女性の方が多様である。

これらの結果は、先行研究とほぼ一致する。

表3 「身のまわりの世話をしてくれる人」〈ケアのネットワーク〉と「悩みや心配事の相談にのってくれる人」〈交際のネットワーク〉としてリストの項目をあげた人の割合（男女別）

リスト	ケアのネットワーク			交際のネットワーク		
	男(有効ケース)	女(有効ケース)	カイ2乗値	男(有効ケース)	女(有効ケース)	カイ2乗値
<b>夫婦・親子関係</b>						
配偶者	95.7% (327)	79.8% (332)	38.629**	88.7% (326)	78.9% (331)	11.566**
自分の親	16.4 (213)	33.5 (215)	16.602**	35.7 (213)	59.8 (214)	24.916**
息子	63.1 (236)	56.4 (241)	2.228	39.6 (235)	49.6 (240)	4.813*
娘	77.4 (221)	81.8 (225)	1.330	39.1 (220)	63.8 (224)	27.219**
<b>親族</b>						
むこ	23.3 (43)	16.3 (43)	.660	20.9 (43)	16.3 (43)	.307
嫁	39.6 (48)	56.9 (51)	2.956	27.7 (47)	39.2 (51)	1.462
孫	19.1 (47)	18.0 (50)	.021	13.0 (46)	4.0 (50)	2.565 <sup>(b)</sup>
自分の兄弟姉妹	15.4 (260)	22.7 (264)	4.574*	37.8 (259)	55.9 (263)	17.081**
その他の親族	3.3 (215)	3.7 (217)	.060	6.5 (214)	5.6 (216)	.184
<b>非親族</b>						
職場・仕事関係者	2.3 (303)	2.0 (150)	.045 <sup>(a)</sup>	25.2 (302)	15.4 (149)	5.513*
近所の人	.9 (327)	6.6 (332)	14.712**	1.2 (326)	10.9 (331)	26.745**
友人・知人	2.8 (327)	9.6 (332)	13.390**	22.1 (326)	40.8 (331)	26.613**
<b>専門機関</b>						
福祉団体・ボランティア	6.4 (327)	9.9 (332)	2.710	.6 (326)	2.1 (331)	2.740 <sup>(c)</sup>
ホームヘルパー・訪問看護婦	10.1 (327)	21.1 (332)	15.096**	1.5 (326)	2.1 (331)	.309
病院の人	17.1 (327)	20.2 (332)	1.013	3.1 (326)	2.4 (331)	.261
老人ホームの職員	4.9 (327)	5.1 (332)	.018	.9 (326)	.9 (331)	.000 <sup>(d)</sup>
相談機関カウンセラー	(選択肢)	なし		4.9 (326)	6.6 (331)	.911
民生委員	(選択肢)	なし		1.5 (326)	1.8 (331)	.078
役所・福祉事務所・保健所の人	(選択肢)	なし		4.0 (326)	3.0 (331)	.454

\*\* sig<.01, \* sig<.05

(a) 1セル(25%)は期待度数が5未満。

(b) (c) (d) 2セル(50%)は期待度数が5未満。



表4 〈ケアのネットワーク〉としてリストの項目をあげた人の割合（男女別、学歴別）

リスト(注)	男性			女性		
	高等教育 (有効ケース)	中初等教育 (有効ケース)	カイ2乗値	高等教育 (有効ケース)	中初等教育 (有効ケース)	カイ2乗値
配偶者	96.5% (170)	94.6% (149)	.640	78.0% (109)	81.4% (204)	.514
自分の親	18.2 (132)	14.1 (78)	.587	41.1 (90)	27.1 (118)	4.509*
息子	60.3 (121)	66.1 (109)	.807	53.8 (78)	59.1 (149)	.569
娘	73.0 (115)	80.1 (100)	1.897	79.1 (67)	83.1 (148)	.498
自分の兄弟姉妹	10.4 (144)	22.0 (109)	6.404*	16.1 (93)	26.3 (156)	3.445
福祉団体・ボランティア	7.1 (170)	6.0 (149)	.134	14.7 (109)	7.4 (204)	4.273*
ホームヘルパー ・訪問看護婦	11.2 (170)	8.1 (149)	.883	29.4 (109)	16.7 (204)	6.876**
病院の人	15.9 (170)	18.8 (149)	.471	18.3 (109)	21.6 (204)	.453

\*\* sig<.01, \* sig<.05

(注)リストの項目は、表3で（男女の有効ケースの計が100ケース以上）かつ（約10%より多くの人をあげている）という基準を満たす項目を選んだ。表6についても同様である。

#### 4.2 ケアのネットワークの社会階層による違い

次に社会階層とケアのネットワークとの関連を見よう。表4は学歴との関連を示したものである。男性においては、兄弟姉妹をネットワークに含めるか否かにおいて学歴差が見られ、学歴が高い方が兄弟姉妹を含めることが少ない。しかし専門機関を含めるか否かについては、学歴差は見られない。一方女性では、専門機関をネットワークに含めるか否かにおいて学歴差が見られ、学歴の高い方が専門機関を含める人が多い。

職業や年収との関連についてみると（表は紙幅の都合で省略）、男性では、職業については学歴と同様の傾向が見られる（ただし10%水準で有意）が、年収に関しては有意差はない。このことから男性においては、職業や年収より学歴においてよりはっきりと、ケアのネットワークの階層差が現れるといえる。一方女性においては、女性自身の職業・年収とケアのネットワークとは関連が見られない（その理由の1つとして、高い職業的地位や収入を持つ女性が少ないため、統計的有意差が現われにくいことがあるだろう）。しかし夫の職業・夫の年収に関しては、学歴と同様、これらが高い方がネットワークに専門機関を含める人が多い。

以上から男性では、学歴が高い方が、兄弟姉妹をケアのネットワークに含める人がより少なく、一方女性では、本人の学歴・夫の職業・夫の年収が高い方が、専門機関を含める人がより多いということがわかった。

ところで、学歴・職業・年収は年齢と共変関係にある。そこで次に、年齢の影響を統制してもこれらの効果が残るかどうかを見るために、30～40歳代と50歳以上に分けて、男性では、本人の学歴と兄弟姉妹をネットワークに含めるか否かの関連を、女性では、本人の学歴・夫の職業・夫の年収と専門機関をネットワークに含めるか否かとの関連を見るという、男女別の3重クロス分析を行った。その結果、年齢の影響を統制しても、男性では階層の高い方がケアのネットワークに兄弟姉妹を含める人が少なく、一方女性では、階層の高い方が専門機関を含め

表5 ケアのネットワーク・タイプの定義とその分布（男女別，学歴別）

リスト	ケアのネットワーク・タイプ				計 (実数)	カイ2乗値	
	A 夫婦親子	B 夫婦親子 親族	C 夫婦親子 専門機関	D 夫婦親子 親族 専門機関			
配偶者/自分の親 /息子/娘	○	○	○	○	○どれか1つ以上 選択している		
むこ/嫁/孫/自分の兄弟 姉妹/その他の親族	×	○	×	○			
福祉団体・ボランティア /ホームヘルパー・訪問看護婦 /病院/老人ホーム	×	×	○	○			×
性別	男	61.3%	16.5%	15.2%	7.0%	315	23.017**
	女	43.2	23.9	18.3	14.6	301	
計		52.4	20.1	16.7	10.7	616	
学歴（男）	高等教育	67.1	10.4	15.9	6.7	164	8.512**
	中初等教育	55.9	22.4	14.7	7.0	143	
	計	61.9	16.0	15.3	6.8	307	
（女）	高等教育	43.0	18.0	30.0	9.0	100	14.887**
	中初等教育	42.6	27.3	13.1	16.9	183	
	計	42.8	24.0	19.1	14.1	283	

\*\* sig<.01, \* sig<.05

る人が多い，という傾向は基本的に変わらなかった<sup>3)</sup>。

最後に，今までの分析を要約する分析を示そう。まず表5の上半分を示した規則に従って，対象者をA～Dの4つのネットワーク・タイプに分類した。その内訳は同じ表の性別の行に示した<sup>4)</sup>。次に，本人の学歴（男女ともにネットワークとの関係において有意差が見られた社会階層の指標）と，このネットワーク・タイプとのクロス分析を行った。その結果を同じ表の下半分を示した。男性では，階層が高い場合はA型（夫婦親子）が多く，あまり高くない場合はB型（夫婦親子+親族）が相対的に多い。女性では，階層が高い場合はC型（夫婦親子+専門機関）が相対的に多く，あまり高くない場合は同階層の男性と同様，B型（夫婦親子+親族）が相対的に多い。

### 4.3 交際のネットワークとの比較

今まで見てきたケアのネットワークを，交際のネットワークと比較してみよう。表6は本人の学歴と交際のネットワークとの関連を示したものである。これによると，男女とも，学歴が高い方が友人・知人をあげる人が多く，兄弟姉妹，息子，娘をあげる人は少ない。学歴を，夫の職業・夫の年収に置き換えた分析においても，ほぼ同様の結果が得られた。これらの結果から，交際のネットワークについては，階層が高い方が友人を多く含み構成が多様であるという，先行研究と同様の結果が得られた。

表6 〈交際のネットワーク〉としてリストの項目をあげた人の割合(男女別, 学歴別)

リスト	男 性			女 性		
	高等教育 (有効ケース)	中等教育 (有効ケース)	カイ2乗値	高等教育 (有効ケース)	中等教育 (有効ケース)	カイ2乗値
配偶者	87.0% (169)	90.6% (149)	1.035	79.6% (108)	77.9% (204)	.119
自分の親	38.6 (132)	32.1 (78)	.921	66.3 (89)	55.9 (118)	2.276
息子	31.7 (38)	46.8 (109)	5.497*	36.4 (77)	57.0 (149)	8.687**
娘	27.2 (114)	51.0 (100)	12.774**	50.0 (66)	69.6 (148)	7.566**
自分の兄弟姉妹	31.5 (143)	46.8 (109)	6.156*	47.8 (92)	61.5 (156)	4.426*
職場・仕事関係者	27.2 (162)	23.0 (139)	.679	17.4 (46)	15.6 (96)	.071
近所の人	.6 (169)	1.3 (149)	.477 <sup>(a)</sup>	11.1 (108)	9.3 (204)	.255
友人・知人	29.0 (169)	14.1 (149)	10.241**	59.3 (108)	32.8 (204)	20.230**

\*\* sig<.01, \* sig<.05

<sup>(a)</sup> 2セル (50.0%) は期待度数が5未満.

表7 社会階層と交際/ケアのネットワーク・タイプ

		交際のネットワーク・タイプ	ケアのネットワーク・タイプ
社会階層: 高い	男性	夫婦親子 + 非親族	夫婦親子
	女性		夫婦親子 + 専門機関
: 高くない	男性	夫婦親子 + 親族	夫婦親子 + 親族
	女性		

表8 社会階層と交際/ケアのネットワーク (公共領域と家内領域の視点から)

		交際のネットワーク	ケアのネットワーク
社会階層: 高い	男性	公共領域	家内領域(狭)
	女性		家内領域(狭) + 公共領域
: 高くない	男性	家内領域(広)	家内領域(広)
	女性		

#### 4.4 分析結果のまとめ

今までに見てきた交際とケアのネットワークの, 階層とジェンダーによる違いを単純化して図式化すると, 表7のようなだろう. ここまでの分析から次のことがわかった.

- ① 〈交際のネットワーク〉に関しては, 男女ともに社会階層が高い方が, ネットワークに友人・知人など非親族を含むことが多いという点で, その構成は多様である. これは先行研究の結果と一致する<sup>5)</sup>.
- ② 〈ケアのネットワーク〉に関しては, 社会階層の効果はジェンダーにより異なる. 男性では, 階層が高い場合は夫婦・親子関係に限定的であるのに対し, あまり高くない場合は夫婦・親子関係に加えて兄弟姉妹を中心とした近い親族にまで広がる. 女性では, 階層が高い場合は, 夫婦・親子関係に加えて専門機関を含むのに対して, あまり高くない場合は夫婦・親子関係に加えて近い親族を含む.

## 5 議 論

ここまでの分析から, ネットワークの多様性に対する社会階層とジェンダーの

効果は、交際とケアのネットワークでは異なることが明らかになった。以下ではこの含意について議論したい。

### 5.1 交際のネットワークとケアのネットワーク

まず近代社会という文脈において、交際およびケアのネットワークとは何かについて論じたい。結論から述べると、前者は、近代の支配的イデオロギーによって公共領域にふさわしい（あるいは公共領域で生じては差し支えない）と見なされてきた人間関係であり、一方後者は、原則として家内領域で生じるべきと見なされてきた人間関係だといえるのではないだろうか。それは以下のような理由からである。

公共領域・家内領域においてはそれぞれ、そこでの行為者が従うべき一定のルールが存在する。近代の支配的イデオロギーによると、公共領域においては、人は独立的でなければならず、他者に対して長期にわたり過度に依存し続けることは、公共領域における行為としてふさわしくない。また公共領域においては身体性を露わにしてはならない。それが例外的に許容されるのは、医療の専門職が関わる場合のみである。一方、家内領域においては、メンバー間の相互依存はむしろ美德として奨励される。また家内領域は身体性を露わにすることが許される領域でもある (Davidoff 1995)。

このように考えるならば、社交的なつきあいは（たとえ建前の上だけでも）相互の独立対等を原則とするものであり (Allan 1979)、まさに公共領域にふさわしい人間関係だといえる。相談や軽い実際の援助も、それが仕事に関するものであったり、またたとえ個人的な問題でも相互的である限り（つまり一方的依存が長期にわたって続くといったものでない限り）、公共領域のルールから逸脱するものではない。したがって交際のネットワークとは、公共領域にふさわしい人間関係だということができる。しかも近代社会における公共領域は生産や政治の領域でもあり、社交はそれらを円滑に進めるための潤滑油としての役割を期待されている<sup>6)</sup>。それに対して身体的ケアという人間関係は、一方的な依存が長期にわたり続くことが多く、しかも親密な身体接触が不可避免的に含まれる。したがってケアのネットワークは、家内領域にこそふさわしい人間関係だといえるだろう (Allan 1985)。

このように考えるならば、社会階層とネットワークに関する代表的研究は、交際・相談・軽い実際の援助といった、近代の支配的イデオロギーによって公共領域にふさわしいとされる人間関係を、主に社会的ネットワークと見なし研究してきたといえる。その反面、身体的ケア（支配的イデオロギーにより家内領域に位置づけられてきた行為）をめぐる人間関係も、個人の直接的社会環境の重要な一部であり、交際のネットワークとあわせて捉えられるべきである、といった視点は弱かったように思われる。このような、交際とケアのネットワークがそれぞれ別々に研究されるという傾向からうかがえるように、〈公共領域と家内領域の分離〉

というイデオロギーは、研究枠組みの設定にまで影響を与えてきたのではないだろうか。

しかしイデオロギーの上では両領域は分離していると見なされるにしても、現実には両者は不可分であり、しかも固定的な境界はない（永田 2000）。そして実際の人間は、公共領域とされる世界と家内領域とされる世界の両方を生きている。つまりイデオロギーによって公共領域とされる部分だけが〈社会〉なのではなく、公共領域と家内領域を含んだ全体が〈社会〉なのである。同様に、社交（そして生産・政治）だけが〈社会〉の機能なのではなく、ケアや再生産も〈社会〉の重要な機能なのである。したがって社会的ネットワークの研究においても、この両面から人々の直接的な社会環境をとらえる必要がある。そして、そうしなければ見えてこない現象が存在する。この点について次に論じよう。

## 5.2 公共領域と家内領域の分離？

“世界は公共領域と家内領域という相異なる2つの領域に分離しており、身体的ケアは家内領域で行われるべき行為である”。これは近代社会における、特に政治的リベラリズムが強い社会における支配的イデオロギーである（O'Connor, Orloff, and Shaver 1999）。このような欧米で生まれた世界観を日本社会の分析に適用するに際しては、十分慎重であるべきだろう。しかしここでの議論をイデオロギーとしての側面に限り、しかも身体的ケア（専門的医療は除く）に関する問題に限定するならば、これらは家内領域で行われるべきであるというのが、第2次大戦後の日本における支配的イデオロギーだったと考えてよいのではないだろうか（大沢 1993）。

ただしこれは、あくまで“支配的イデオロギー”だったのであり、すべての人がそのように考えていたわけではないし、またすべての人が実際にそうしていたわけでもない。そうであるとすれば、現代日本において、〈公共領域と家内領域の分離〉というイデオロギーに最も近い社会的ネットワークを持つのは（言い換えれば、このイデオロギーに最も近い直接的な社会環境で生活しているのは）、どのような人だろうか。

この問いに答えるために、概念の定義をしておこう。まず〈公共領域と家内領域の分離〉を、〈身体的ケアが家内領域でのみ行われること〉という意味で用いる。次に、夫婦間・親子間のつきあいを〈狭い意味での家内領域〉におけるネットワーク、成人し別世帯を形成している兄弟姉妹やその他の親族とのつきあいを〈広い意味での家内領域〉におけるそれ、そして友人・知人、職場・仕事関係者、そして専門機関との関係を〈公共領域〉におけるそれと定義する。最後に、戦後日本の〈身体的ケアは家内領域で〉というイデオロギーにおける家内領域とは、〈狭い意味での家内領域〉を意味すると考えよう。以上の定義に従うと、先に示した表7はさらに表8のように書き換えることができる。

表8から明らかなように、〈身体的ケアは家内領域で〉という意味での〈公共領

域と家内領域の分離」というイデオロギーに最も適合的なネットワークを持っているのは、階層が高い男性である。それ以外の人々はこのようなイデオロギーとは異なるネットワークを持っている。すなわち高階層の女性は、ケアのネットワークが家内領域に留まらず、専門機関を含むという形で公共領域にまで延びている。また階層があまり高くない男女においては、ケアのネットワークが別世帯を形成しているであろう成人した兄弟姉妹関係にまで延びている。

## 6 結 論

今までの議論から、次の2点を本稿の結論とし、今後の検証に向けての問いとしたい。第1に、“階層が高い方がネットワークの構成は多様である”という長年支持されてきた知見は、表7、表8のような多様なネットワークのうち的一部分（交際のネットワーク）のみを見た結果得られたものではないだろうか。第2に、交際とケアという両方のネットワークを視野に入れると、く公共領域と家内領域の分離」という世界や人間関係のあり方は、少なくとも現代日本においては、階層の高い男性に最もよく当てはまるものであり、それ以外のカテゴリーの人々はこれとは異なる人間関係を持つ人が多いのではないだろうか。

最後に今後の課題として、①人々のネットワークが階層とジェンダーによってこのように異なるのはなぜなのかを実証的に明らかにすること、②それを現代日本における生産・再生産労働の階層・ジェンダー間分業と関連づけて考察することを指摘し、本稿を終えたい。

### [注]

- 1) 本調査はコープ神戸生協研究機構・生活研究所の助成により行われた。詳しい調査方法については、山根・斧出・藤田・大和(1997: 6-7)を参照。
- 2) 表3、表4、表6では、自分の親、息子、娘、むこ、嫁、孫、自分の兄弟姉妹、その他の親族、のそれぞれについて〈いる〉と答えた人のみを分析した。職場・仕事関係者については〈就業している人〉のみを分析した。これ以外の項目（近所の人、友人・知人、専門機関）については、すべての人がそのような人・機関へのアクセスを潜在的に持っていると仮定して、回答者すべてについて分析を行った。表における〈有効ケース〉とは、これら分析対象となったケースを示す。
- 3) 3重クロス集計の結果を男女別に述べよう（表は紙幅の都合で省略）。男性については、30～40歳代では、学歴の高い方が兄弟姉妹をネットワークに含める割合が有意に少ない。50歳以上でも同様に、高学歴層が兄弟姉妹を含める割合は、低学歴層の半分以下であるが、そもそも50歳以上で兄弟姉妹を含める人が割合・ケース数（10.9%・17人）とも少ないためか、統計的には有意でない。次に女性について見ると、まず本人の学歴・夫の職業によって専門機関をネットワークに含める割合が違うかどうかについては、30～40歳代では、階層が高い方が専門機関を含める割合が有意に多い。50歳以上でも同じ傾向が見られるが、有意ではない。次に夫の年収（800万円以上/未満）によって専門機関を含める割合が違うかどうかを見ると、30～40歳代では有意差はないが、50歳以上では年収が高い方が専門機関をあげる割合が有意に多い。また夫の年収の分割点を600万円以上/未満に設定すると、30～40歳代でも同様の有意差が見られる。

- 4) A～Dに分類されなかったケースとして、リスト中の項目のどれも選択しなかったケースが31ケース(4.6%)、回答なし・その他が合わせて21ケース(3.1%)ある。
- 5) ただし兄弟姉妹などとのネットワークに関しては、階層が高い層より高くない層が多いので、この点に注目すると、階層が高い方がネットワークの構成は多様だと単純に結論づけることはできないかもしれない。大谷(1995)も「親しい人」として親戚をあげる人は、日本では学歴が高い方が少ないことを報告している。
- 6) 歴史的に見てもビジネスや政治は、近代になって中産階級と労働者階級にく公的なこととして新たに開かれた世界であり、それらを円滑に行うために様々な自発的結社やバブなどの社交の世界が生まれた。そして当時それらは、男性にのみ開かれた世界であった(Hall 1992)。

#### [文献]

- Allan, Graham, 1979, *A Sociology of Friendship and Kinship*, London: George Allen and Unwin.
- , 1985, *Family Life: Domestic Roles and Social Organization*, Oxford: Basil Blackwell.
- Bott, Elizabeth, [1957] 1971, *Family and Social Network*, 2<sup>nd</sup> ed., London: Free Press.
- Campbell, Karen E., Peter V. Marsden, and Jeanne S. Hurlbert, 1986, "Social Resources and Socioeconomic Status," *Social Networks*, 8: 97-117.
- Davidoff, Leonore, 1995, *Worlds Between: Historical Perspectives on Gender and Class*, Cambridge: Polity Press.
- Fischer, Claude S., 1982, *To Dwell among Friends*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Gans, Herbert J., [1962] 1982, *The Urban Villagers*, updated and expanded edition, New York: The Free Press.
- Goldthorpe, John H., David Lockwood, Frank Bechhofer, and Jennifer Platt, 1969, *The Affluent Worker in the Class Structure*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hall, Catharin, 1992, *White, Male and Middle Class: Explorations in Feminism and History*, Cambridge: Polity Press.
- Leger, Fred St. and Norman Gillespie, 1991, *Informal Welfare in Belfast: Caring Communities?*, Aldershot: Avebury.
- Lewis, Jane and Barbara Meredith, 1988, *Daughters Who Care: Daughters Caring for Mothers at Home*, London: Routledge.
- 前田信彦・目黒依子, 1990, 「都市家族のソーシャル・ネットワーク・パターン」『家族社会学研究』2: 81-93.
- Marsden, Peter V., 1987, "Core Discussion Networks of Americans," *American Sociological Review*, 52(1): 122-131.
- Mills, C. Wright, 1959, *The Sociological Imagination*, Oxford: Oxford University Press. (= 1965, 鈴木広訳『社会学的想像力』紀伊国屋書店.)
- 永田えり子, 2000, 「公私の分離は必要か?——フェミニズムと公共性」『社会学評論』50(4): 603-615.
- 野辺政雄, 1999, 「高齢者の社会的ネットワークとソーシャルサポートの性別による違いについて」『社会学評論』50(3): 375-392.
- 野沢慎司, 1999, 「家族研究と社会的ネットワーク論」, 野々山久也・渡辺秀樹編『社会学研究シリーズ1 家族社会学入門——家族研究の理論と技法』文化書房博文社: 162-191.
- Oakley, Ann and Lynda Rajan, 1991, "Social Class and Social Support: The Same or Different?," *Sociology*, 25(1): 31-59.
- O'Connor, Julia Sila, Ann Shola Orloff, and Sheila Shaver, 1999, *States, Markets, Families: Gender, Liberalism and Social Policy in Australia, Canada, Great Britain and the United States*,

Cambridge: Cambridge University Press.

- 大沢真理, 1993, 『企業中心社会を越えて——現代日本を〈ジェンダー〉で読む』時事通信社.
- 大谷信介, 1995, 『現代都市住民のパーソナルネットワーク』ミネルヴァ書房.
- Qureshi, Hazel and Alan Walker, 1989, *The Caring Relationship: Elderly People and their Families*, London: Macmillan Education Ltd.
- 笹谷春美, 1994, 「ジェンダーとソーシャルネットワーク——旧炭産（過疎）地と大都市居住の70歳男女に関する実証的研究」『平成5（1993）年度シニアプラン公募研究年報』（財）シニアプラン開発機構: 117-138.
- 菅野剛, 1998a, 「社会的ネットワークの趨勢——75年と95年における社会階層の効果の変遷」, 白倉幸男編『社会階層とライフスタイル』1995年SSM全国調査委員会: 271-292.
- , 1998b, 「女性と社会的ネットワーク」, 白倉幸男編『社会階層とライフスタイル』1995年SSM全国調査委員会.
- 須田木綿子, 1986, 「大都市における男子一人暮らし老人のSocial Networkに関する研究」『社会老年学』24: 36-51.
- 玉野和志, 1990, 「団地居住老人の社会的ネットワーク」『社会老年学』32: 29-39.
- Townsend, Peter, 1957, *The Family Life of Old People*, London: Routledge and Kegan. (= 1974, 山室周平訳『居宅老人の生活と親族網——戦後東ロンドンにおける実証的研究』垣内出版).
- 上野加代子, 1988, 「中高年女性のソーシャル・ネットワーク——有配偶と無配偶の比較分析」『家族研究年報』14: 73-86.
- Ungerson, Clare, 1987, *Policy Is Personal: Sex, Gender and Informal Care*, London: Tavistock. (= 1999, 平岡公・平岡佐智子訳『ジェンダーと家族介護——政府の政策と個人の生活』光生館.)
- Wellman, Barry, 1979, "The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers," *American Journal of Sociology*, 84(5): 1201-1231.
- , 1985, "Domestic Work, Paid Work and Net Work", Steve Duck and Daniel Perlman, eds. *Understanding Personal Relationships*, London: Sage: 159-191.
- Willmott, Peter, 1987, *Friendship Networks and Social Support*, London: Policy Studies Institute.
- 山根真理・斧出節子・藤田道代・大和礼子, 1997, 『家族多様化時代における家事分担の変容可能性に関する調査研究』コープこうべ・生協研究機構.
- Young, Michael and Peter Willmott, 1957, *Family and Kinship in East London*, London: Routledge and Kegan Paul.

(関西大学社会学部助教授, ryamato@ipcku.kansai-u.ac.jp)

## Social Networks and Socioeconomic Status in Japan : A Comparison between the "Network of Sociability" and the "Network of Care"

Reiko YAMATO  
Kansai University

ryamato@ipcku.kansai-u.ac.jp

This paper aims at showing the relationship between people's socioeconomic status, gender, and their



social networks in Japan. Previous studies on this theme have confirmed that people with higher status have more varied networks than those with lower status. However, this paper argues that *the-higher-status-the-more-varied-networks thesis* is based on the evidences which are limited to the particular aspects of personal relationships, that is, sociability, receiving advice and minor practical help. Apart from these relationships which can be called “networks of sociability”, the present study looks at the personal relationships through which people can attain physical care, that is, “networks of care”.

Our survey data including both “networks of sociability” and “networks of care” is analyzed. The result shows that, regarding “networks of sociability”, the thesis of the-higher-status-the-more-varied-networks is supported by our data too. However, as for “networks of care”, a person’s social status has a different effect on their network composition between sexes; for men, the higher his status is, the less varied networks he has, while for women, the opposite is true: the higher, the more varied networks. In the final section, on the basis of these findings, it is argued that, not people in other categories, but only men with higher socioeconomic status have personal relationships which fit in the liberal ideology about modern society: the separation of the public and private.

Key words: social network, care, the public and private